豊岡中学校

同窓会々報

第42号

文字は書くもの

会長　杉浦　美充（３０回生）

第75回生の皆さん、卒業おめでとう。今年も新たに185名の同窓生が入会されますこと、心より歓迎いたします。また、関係者の方々におかれましては日頃より多大なるご理解ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

毎年この誌面をお借りして、野球関連（特に大谷選手）の話題を書かせていただいてますが、今年度の活躍は、皆さんご承知の通りだと思いますので、敢えて今回は触れません。

昨年10月に郵便料金が値上げされ、年賀状を出す人は減少し、年賀状終いをされる方も増えたようです。2025年1月1日に日本郵便が公表したデータによると、1月1日に配達された年賀状数は、前年度の66％（1人当たり約4通）に留まり、過去5年間で最大の減少率となり、2020年を基準とすると、38％といった数だそうです。郵便料金値上げが大きな要因だと思いますが、高齢者は年賀状終いをし、若者はSNSやメールを活用した年始のご挨拶に移行した結果、このような数字になったのではないでしょうか。実際我が家に届いた年賀状の中にも「今年を最後に…」といったものが何通かありました。年賀状に限らず、様々な季節のご挨拶を葉書に書いて送る、といった文化は無くなってしまうのではないか、とも思われます。

日本には中国から伝わった「漢字」に始まり、「ひらがな・カタカナ」といった3種類の文字が存在します。9世紀末頃には、この3種類の文字が日本では存在していたようです。他国をみても3種類の文字を使っているのは日本だけで、漢字一文字に複数の読み方があるのも日本だけです。書道の世界では、漢字には「楷書・行書・草書・篆書・隷書」と5つの書体があります。「楷書」をくずしたものを「行書」、更にくずしたものを「草書」だと思われている方も多いと思いますが、実はその逆で、歴史の古い順に「篆書→隷書→草書→行書→楷書」となるそうです。

このように日本では古来より、文字・書道といった文化があり、決して失くしてはいけないものだと思います。パソコン・スマホの普及により、文字を打つことが多くなった昨今、上手い下手に関係なく、「文字は書くもの」と思い返してみてはいかがでしょうか。

制服の第二ボタン

豊岡中学校長　鈴木　孝昌

学校に制服は必要かという質問に、「学生らしい服装」「どこの学校の生徒であるかわかりやすい」「愛校心や一体感が感じられる」「格差を感じさせない平等の象徴」「何を着てよいか悩まなくて済む」「冠婚葬祭に役立つ」など、アンケートに答えた学生から回答があったデータを見ました。特に高校の制服には特徴があり、その制服が着たくて進学したという方も多いと聞きます。もちろん反対意見もたくさんありました。

制服がその学校の象徴であるという伝統がある一方で、詰襟やセーラー服のデザインをブレザー型に変更した学校もあります。男女の区別がないデザインが求められる時代背景も変更理由のひとつとして大きいと思われます。いっそのこと制服を廃止して私服にしましょうと、私服登校に変更した学校もあります。制服だけでなく、男女共学にした学校や校名を変更した学校もあります。それに伴い、校歌の歌詞を変更したり校歌そのものを変更したりした学校もあります。

何が正しく何が間違っているのかということを話題にしようとするつもりはございません。個人的には、豊岡中学校の制服も校歌も大好きなので、今すぐに変更する必要性は感じていません。この同窓会報をお読みになっている方がどれくらいいらっしゃるかわかりませんが、母校を思い出すとき、学校生活のどんな風景を思い描くのでしょうか。その風景の中にいるあなたは、どこで、だれと、どんな服装で何をしていましたか。今でも校歌を覚えていますか。卒業式の日に制服の第二ボタンをもらったり渡したりしましたか。この風習も詰襟制服廃止とともになくなるのでしょうか。少子化や時代の変化によって、豊岡中学校がいつまでも同じであることはないかもしれませんが、豊岡中学校で仲間とともに生活した思い出はいつまでも続いてほしいと願っています。結びになりますが、杉浦美充同窓会会長をはじめ、歴代同窓会役員の方々には、本校第75回生の入会を受け入れていただいたことに感謝申し上げます。今後も、貴同窓会の末永いご発展を祈念いたします。

豊岡中学校同窓会

同窓会役員

会　長	３０回生	杉浦　美充
副会長	２５回生	山内　壱仁
副会長	２５回生	前川　明俊
副会長	３３回生	中村　泰久
副会長	４７回生	岩瀬　彰吾

第 75 回常任・学級委員

常任委員
　４名

学級委員
　１０名

発　行　豊岡中学校同窓会
〒440-0832　豊橋市中岩田一丁目５番地の２
ＴＥＬ　０５３２－６１－３２７８
ＦＡＸ　０５３２－６５－１２０１

新入会員の声

キセキの糸

第７５回生　馬場　悠斗

中学三年間は一つの映画のようなものであった。そして卒業という名のエンドロールが流れると、これまでがあっという間のようで名残惜しく感じる。それと同時に数々の思い出の場面がよみがえってくる。

「体育祭」。全身全霊で競技に挑み、互いに応援し合う姿が目から離れない。各クラス、団の個性があふれ出るパレードからは、ほとばしる情熱が感じられた。

「合唱コンクール」。短い放課の時間でさえ練習に励みハーモニーを育んでいった。改善点を共有し合い、同じ目標に向かって前進していった。そして、学校中に響いた合唱は「努力の象徴」であった。

「修学旅行」。歴史ある建造物は当時の時代背景を想像させるものばかりであり、美々しい自然が生み出す風景は自然の迫力や悠久さを私たちの身に沁みさせた。また、仲間の新たな一面に「そうなの？！」となる機会が多くあった。

たくさん笑い合い、共に過ごした日々。困難という壁に直面したときも支え合い、乗り越えてきた日々。そのすべてが青春の軌跡であり、一生に一度の奇跡であった。

これから私たちは、夢に向かいそれぞれの道を歩んでいく。豊岡の伝統や地域の人々とのつながりを貴び、自立していく。しかし、「キセキ」が生んだ絆の糸が綻びることは決してないだろう。

そして今日、１８５人は同窓会へと入会する。舞い散った花びらはレッドカーペットのように地面を染め、小鳥は私たちに歓迎の歌を届けていた。

これから私たちは同窓会の一員となります。どうぞよろしくお願いします。